

ワールドカップ1戦（ベオグラード、セルビア）ITO 参加報告

東京都ボート協会所属
国際審判員 山崎 佳奈子

はじめに

2022年5月27日（金）から5月29日（日）、セルビアベオグラードで開催された WC I（ワールドカップ1戦）に International Technical Officials (ITO)として審判参加させていただきましたので、以下ご報告させていただきます。

<大会概要>

日 時：2022年5月27日（金）～5月29日（日）

コース：Ada Ciganlija Regatta Venue ベオグラード、セルビア

種 目：W2- M2- W2x M2x W4- M4- W1x M1x LW2x LM2x W4x M4x W8+ M8+

LW1x LM1x PR1 M1x PR2 Mix2x PR3 Mix4+ PR2 W1x （20種目）

参加国：36ヶ国（208クルー）

2018年に初めて NTO として審判参加したセルビア、ベオグラードに、今回 ITO として参加した。

このコースは「サヴァ川」という元々川だった所を堰き止めた人工湖である。コース名の「Ada Ciganlija（アダ・ツイガンリヤ）」はセルビア語で「ジプシーの中州（川の中の島）」という意味だということが、今回初めてわかった。海のないセルビアでは、別名「Belgrade Sea」と言われ、泳いだりや様々なアクティビティを楽しんでいる。前回には無かった「バンジージャンプ」のクレーンまであった。

<ITO 審判員>

President of Jury : KARAJOVIC – IBROCIC Ruzica (SRB)

Jury : 18名

TUCKER Christopher (AUS) HULJEV Helena (CRO) KLEMES Ivo (CZE) ZABALA URIGAIN Uxue (ESP) PARQUIC Nicolas (FRA) Mc INTOSH Claire (GBR) MEYNET Ilaria (ITA) YAMAZAKI Kanako (JPN) CERVELLO Luis (MEX) FUENTES CASTANEDA Santiago (MEX) ERDMAN Jerzy (POL) FEDIUC Gheorghe- (ROU) FAJFAR Peter (SLO) DZINCIC Igor (SRB) WELIKALA Lasantha (SRI) BERGUIGA Meriam (TUN) VAJDA Nikola (USA) ENGELMANN Erhard (GER)

今回 DEMIN (RUS) が欠席し、スペアの ENGELMANN が繰り上げになった。

審判長は東京2020で ITO 参加していた Ruzica、NTO には同じく東京2020で NTO 参加していた ANA Nicolic とボランティア参加していた JAMES Holmes、MURRAY Litvak、Jane がおり、久しぶりの再会を喜んだ。

また、日本からは NTO として田畑喜彦氏が参加している。

<5月27日（金）大会1日目>

午前：Control Commission (Outgoing Pontoon)

業務

CC 責任者	全体管理、出艇、帰艇の把握
ITO	ボート装備のチェック、広告、ステッカーのチェック、バウナンバーの指示
NTO	Photobook での選手チェック
ボランティア	バウナンバー、GPS の取り付け

大会初日の OUT ポンツーンはまだ準備が出来ておらず、監視用の Photobook (選手の顔写真が載っているもの) も届いていなかった。またデッドウェイトの連絡も入らず、初めのレースが舵手付きだったので、コックスに DW の有無を確認した。

ボランティアがクルーに合ったバウナンバーと GPS を装着するのだが、ITO、NTO、ボランティアがそれぞれバウナンバーの指示を出していたことから混乱が生じ、違うクルーのバウナンバー、GPS を取り付けたり、バウナンバーと GPS を付けずに出艇しようとするクルーがいたりしたため、バウナンバーの指示は ITO がすることに統一した。ワールドカップという特性上、1つの種目に同じ国から2~3クルーエントリーしており、ブレードとステッカーだけではどのクルーか判別できないため、その都度クルーに「CHN 1 or 2 or 3?」と確認しながらの作業となった。

ヒールロープを結んでいないクルーがいくつかあり、結ぶように指示をした。

午後：Umpire 5

今回主審艇は6艇でゾーン審判だった。

待機場所は 100m、480m、860m、1250m、1625m、1900m でスタート設備は海の森と同じく足でフィンガーを動かすタイプである。



スタートタワーの下には大きな電子時計があり、2分前になると黄色いライトが点滅する。

コースにはかなりの水草が生えており、大きな藻刈船で事前に藻刈を行ったとのことだった。にも拘らず水面から見える水草の勢いはかつての戸田コース以上のものだと感じた。

大会の審判艇ドライバーは地元のクラブの人たちがボランティアで参加していた。彼らは選手でもあり、かつてヨーロッパ選手権に出たというドライバーもいた。



<5月28日（土）大会2日目>

午前・午後：Boat Weighing

業務

CC 責任者	全体管理、出艇、帰艇の把握
ITO	ボート計量
NTO (IN)	艇計量対象の誘導
ボランティア	バウナンバー、GPS の取り外し

クルーが艇を上げるとボランティアがバウナンバーと GPS を取り外す。IN Pontoon の ITO が艇計量の指示をし、NTO が艇計量所まで誘導する。この日は最終レースが 12:59 のため 1 シフトで終わる。



<5月29日（日）大会3日目>

午前・午後：Umpire 6

最終日は Umpire 6 で午前中はゾーンだったが、フィニッシュ付近の白旗を上げる順番になった。

天候はあいにくの雨でワールドカップ1という大きな大会と思っていたが、観客席はまばらであった。ドライバーに聞くと、入場は無料で観戦は自由にできるそうだ。前回 2018 年に WCI に参加した際には天気が良く気温も高かったため、水着姿の海（川）水浴客がコース脇からレースを観戦していたが、今回は天気もあって泳ぐ人はほぼいなかった。

昼休みが無いため、20分空いてそのまま A 決勝に入った。A 決勝からはダイナミック（全レース追行）に変わった。



A 決勝は M2x と M4-、W8+ のレースに迫行した。A 決勝だしワールドカップなので白旗を振る必要は無いだろうと思っていたら、M4- で艇が曲がり、白旗で警告をした。実はメガホンが手に持てる大きさではなく、下に置いていたので、とっさのことで地声で警告をしてしまった。最初メガホンを見た時ドライバーに「これはみんなどうやって持っているのか？」と聞いたら「下に置いている。大丈夫、使うことはない。」と言っていたので安心しきっていた。そういえば私の前に W4- に迫行していた Helena も地声で警告をしていたのを思い出した。

タイの審判の Angela が Live Streaming で私を見たときと写真を送ってくれた。

思いもかけずよい記念となった。

残り 4 レースとなった時、雷が鳴りだし、レースが中断した。一度モーター桟橋に戻り、審判控室に戻ったが、約 1 時間後に再開した。結局最終レースは 15:06 となり、空腹との戦いになった。



<セレモニー>

今回の WCI では 2 つのセレモニーがあった。

28 日 (土) の Nations Dinner (各国参加者と ITO、NTO が参加) と 27 日 (金) の「Memory of Dragana」である。

Dragana とはセルビアの女性審判で、一昨年病気で亡くなった。彼女はとても親切で皆から愛されていた。2018 年の WCI で初めての国際審判、大会参加に戸惑っている私に色々教えてくれ、Jury Outing (審判のレクリエーション) ではジョークを交え陽気に話す彼女の周りには笑いが絶えなかった。ご家族を招いたこの会には WR の J-C Rolland 会長も参加した。彼女が皆から慕われていたことの証かと思う。



28 日の Nations Dinner では、今回無かった Jury Outing の代わりに ITO と NTO の親睦を深めることができた。昨年のポルトガルで会った審判もあり、楽しい再会になった。

この Nations Dinner ではあるサプライズがあった。今回の WCI で NTO Lead として大活躍した ANA Nicolic を称え、彼女への感謝を表すため ITO、NTO が集まってプレゼントを贈呈したのである。

World Rowing Cup I Belgrade 2022

東京 2020 ボランティアの MURRAY はこの一大ミッションを任せられ、緊張の中お気に入りのジャケットを着て ANA の貢献を称えるメッセージとプレゼント贈呈を引き受けた。

サプライズが成功したかどうかは ANA の表情を見ていただければおわかりかと思う。



<最後に>

今回の WC I では 7 人の女性 ITO が参加した。審判長も女性である。ここ数年で日本でもそうだが、おそらく女性の国際審判も増えてきているのだと思う。コロナ禍でありながらこれだけの審判が集まったことに驚くとともに、昨年のポルトガルでも感じたがヨーロッパではコロナに関しての意識が変わってきている気がする。「アフターコロナ」の時代に舵を切っているのだと感じる。



また、今回 ITO で参加していたアメリカの NIKOLA は今年で定年だと言う。セルビアに住んでいた彼はセルビア語も話せるため、私が帰国のために必要な日本政府フォーマットの「陰性証明書」を取得するために色々尽力してくれた。日本の国際審判である引田氏とは今でも親交があるとのことだった。彼以外にもいろいろな国際審判から栗山氏、東氏など「日本の国際審判を知っているよ」と言われ、私も早く海外の審判に「カナコを知ってい

World Rowing Cup I Belgrade 2022

る」と言われるようになりたいと思った。

蛇足であるが、実は私の名前はヨーロッパで覚えてもらいやすかった。某ウイスキーの名前と同じだからだ。今回会ったドライバーにも「ヤマザキ！知っているよ。ウイスキー！」と言われた。数年前は絶対覚えてもらえないだろうと思ったこの名前がこんなにも流通するとは不思議なものである。

二度目のセルビア WC I ということで、今回は審判というよりはそれ以外に重点をおいたレポートになっている気がするが、審判業務のレポートについては田畑氏の NTO レポートにお任せしたいと思います。

最後に、休暇を認めてくれた勤務先（東京都ポート協会）、昨年に引き続き送り出してくれた家族に心から感謝するとともに、審判派遣いただいた日本ポート協会にも感謝申し上げます。ありがとうございました。

